第 65 回全日本プロ選手権自転車競技大会レポート

第 65 回全日本プロ選手権自転車競技大会は５月 28 日、青森競輪場で開催され全国から集結した１７２名の精鋭が各競技で熱戦を展開した。
スプリントは中川誠一郎（熊本）が５回目の優勝。ケイリンは成田和也（福島）が初出場初優勝。１㎞タイムトライアルは南潤（和歌山）が初の栄冠。４㎞個人パーシュートは渡邉正光（福島）が連覇を達成。エリミネイションは前回、前々回３位の西村光太（三重）が悲願の初優勝。チームパーシュートは南関東地区・神奈川チームが昨年に続き優勝。チームスプリントは中部地区・三重チームが２年ぶりの栄冠を手にした。

ケイリン

ケイリン優勝の成田和也㊥

ケイリンは成田和也（福島）が同種目初出場で優勝した。今大会から、ＵＣＩルールに則り、６車立てもしくは７車立てで行われることになった。３着までが１／２決勝へ勝ち上る予選。１組目は村上博幸（京都）の捲りに乗った香川雄介（香川）が１着で入線。俄か雨のもと行われた２組目は打鐘から先行した永井清史（岐阜）が勝利した。第３組は最終周回で先行した海老根恵太（千葉）を天田裕輝（群馬）が捲り最初にゴール。４組は逃げる三谷竜生（奈良）を成田和也（福島）が捉えて１位となった。５組は木暮安由（群馬）が先行した原田研太朗（徳島）を差して１着、２着の原田、３着の飯野祐太（福島）とともに１／２決勝へ。６組は和田健太郎（千葉）が差し、７組は吉澤純平（茨城）が捲りでそれぞれ勝利を飾った。21 名の選手が３組に分かれて行われる１／２決勝の１組目は最終ホームから先頭が目まぐるしく入れ替わる中、和田健太郎（千葉）が１着でゴールを掛け抜けた。２組目は最終ホームで村上が先行。それをバック過ぎで木暮が捲り勝利。３組目は捲った小松崎大地（福島）を同県の成田和也がゴール前で差して１着。１／２決勝の１・２着６名と抽選で選ばれた３着１名による決勝戦は成田、松浦悠士、前反祐一郎の広島勢、和田、小松崎、原田、木暮の順で周回。残り２周でペーサーが外れると小松崎が発進し、前受けの成田が迎え入れて最終周回へ。バックで松浦が捲りを打つも不発に終わり、ゴール直前で成田が差して栄冠を手にした。

スプリント

スプリント決勝・中川㊧対新井㊨

スプリントは中川誠一郎（熊本）が５回目の優勝を飾った。まず、24名による予選２００ｍタイムトライアル。第７走者終了までのトップタイムは荒井崇博（佐賀）の10秒７３８だったが、前回大会４位の根田空史（千葉）が10秒６４３を出して首位に躍り出る。15番目の横山尚則（茨城）まで根田のタイムは破られなかったが、実績十分の中川が16番目に出走し、10秒３９０でトップへ。上位16名による１／８決勝は８組の内、６組でタイム上位者が勝ち上がった。１／４決勝も順当にＴＴの上位４名が１／２決勝へ。３本勝負の１／２決勝の注目カードはそれぞれに４回優勝の実績を持つ中川と金子の対戦。１本目は最終ホームで後方から仕掛けた中川がそのまま逃げ切り先取。２本目も逃げ切りストレート勝ち。根田と荒井の対戦は１本目は根田を先に出させた荒井が最終２コーナーで前に出て勝利。２本目も逃げる根田を荒井が捲り、こちらもストレートで決勝へ進出した。決勝は中川と荒井の九州地区対決で昨年の九州地区プロでの再戦となった。ちなみにその時は荒井が勝っている。１本目は中川が最終周回から逃げて、荒井がそれを追う展開。バックで荒井が捲りを試みるが、中川が微妙にけん制して許さず、そのままゴール。２本目は先頭を走る荒井がバック付近で１分近いスタンディングを行う、中川はこれに対応するも、結局は前に出される。４コーナー手前から隙をついて荒井が先行を試み、一時は車間を空けたものの、中川は落ち着いて荒井を捉え、２年ぶりの栄冠を手にした。なお、根田と金子の３位決定戦は最終１コーナーで後方から内側に切り込んで、ダッシュした根田が金子の追込みを許さず勝利した。

１㎞タイムトライアル

１㎞ＴＴ優勝の南潤

１㎞タイムトライアルは南潤（和歌山）が早坂秀悟(宮城)の３連覇を阻み、初の栄冠を手にした。この種目は 17 名の選手が参加。７番出走の１１１期、松本貴治（愛媛）が１分５秒８０８で初めて５秒台に入る。次走の稲毛健太（和歌山）も１分５秒４６０を出して首位に立つ。10 番出走の南は最初の２００ｍを 16 秒３４３、４００ｍは 27 秒４５９と前回大会の早坂の記録を上回り、好記録への期待がぜん高まる。ゴール通過後に発表されたタイムは１分３秒９１２。それまでのトップタイムを約１秒５更新し、後の選手にプレッシャーをかける。その後、南のタイムを上回ることなく、最終出走者で前回チャンピオンである早坂の発走を迎える。４００ｍのラップは 27 秒２６６と南のそれを上回り後の１周へ。観客が期待する中、早坂が後の力を振り絞りゴール。タイムは１分３秒９５５で惜しくも３連覇は叶わなかった。素晴らしい激闘に場内から拍手が沸き起こった。

チームスプリント

優勝した三重チーム・チームスプリント

チームスプリントは中部地区・三重チーム（浅井康太、柴崎淳、伊藤裕貴）が２年ぶりの栄冠を手にした。第１出走はアテネオリンピックで、この種目銀メダリストの井上昌己擁する、九州地区・長崎チームでタイムは１分 16 秒７８２。第２出走の近畿地区・兵庫、京都、奈良の混成チームはスタート直後に第１走者と後続が離れてタイムロスして、１分 16 秒５８６に終わる。３走目は一昨年２位の南関東地区・神奈川チーム。前年とほぼ同じラップを刻み、１分 15 秒６８４のタイムを出し、トップに立つ。４走目の中国地区・岡山チームと５走目の昨年覇者関東地区・栃木チームは南関東地区のタイムを上回ることなく、６組目の中部地区を迎える。１周目、２周目のラップタイムは首位の南関東地区を上回ることができずにいたが、第３走者の浅井の激走で出したタイムは首位に立つ１分 14 秒９１４。次の四国・徳島チームは中部地区のタイムを上回ることができず、最終出走の北日本・青森、岩手の青森支部チームへ。１周目、２周目のラップは中部地区のタイムを上回り、期待がもたれたが、最終的には１分 15 秒２４９で２位に終わった。中部地区は第 56 回（平成 21 年）大会の初優勝以来この 10 年で７度の優勝と圧倒的な力を誇っている。

チームパーシュート

チームパーシュート表彰式

４㎞チームパーシュートは南関東地区・神奈川チーム（小原太樹、嶋津拓弥、堀内俊介、佐々木龍）が昨年に続き優勝した。１組目は中国地区・広島チームと四国地区・愛媛チームの対戦。序盤は四国地区がリードするもじわじわと中国地区が差を詰める。中盤で１車離れたにもかかわらず、着実に周回を重ね先着した。２組は前年優勝の南関東地区と近畿地区・兵庫チームの組み合わせ。南関東地区は地力の違いを見せ、近畿地区が２０００ｍ手前で一人ちぎれたこともあり、約 10 秒の差をつけてゴール。トップタイムを記録した。３組目は一昨年優勝で昨年２位の北日本地区・青森、秋田の青森支部チームと中部地区・三重チームの対戦。北日本チームは昨年の雪辱を胸に最初から飛ばすも２周回目早々に前輪のトラブルにより一人脱落。３車での戦いを強いられた。それでも最初は中部地区を上回っていたが、中盤すぎにはリードを許し、力を発揮出来ずに終わった。最終の４組目は九州地区・大分チームと関東地区・茨城チームの組み合わせ。前半は微差ながら、関東地区がリードすると九州地区が差を詰め、最終的には先着したが、南関東地区のタイムを上回れなかった。

個人パーシュート

個人パーシュート優勝の渡邉正光㊥

９名の選手が出場した４㎞個人パーシュートは渡邉正光（福島）が連覇を達成した。１組目、単走の武田憲祐（神奈川）のタイムは５分 29 秒７０３。２組目は前年３位の須賀和彦（茨城）と福島武士（香川）顔合わせ。須賀は序盤から力の違いを見せつけ、８周回目で福島を抜き、４分 50 秒８６７のタイムを出した。３組目は坂上忠克（石川）と山崎芳仁（福島）が出走。坂上は途中まで須賀のタイムを上回るが結果的には届かず。４組目は同種目３連覇の経験のある岡嶋登（大阪）と柏野智典（岡山）対戦。岡嶋は須賀のタイムを上回り、柏野を追い抜くも、終盤ペースダウンし首位に立てず。最終５組目は前年優勝者の渡邉と同２位の成松春樹（佐賀）のマッチアップ。前半から飛ばす渡邉、最初は抑えて後半勝負を目論む成松。しかし、渡邉は後半もペースを落とすことなく成松を圧倒し先着。タイムも４分 47 秒４５２と須賀に３秒以上の差をつけた。

エリミネイションレース

エリミネイション表彰台・優勝した西村光太㊥

エリミネイションレースは前回、前々回３位の西村光太（三重）が悲願の初優勝を飾った。昨年の和歌山大会は 30 度近い気温の中、２度のドロー周回もあり、消耗戦の様相を呈した。今回は快適な気温の中、昨年以上に激しく波乱の多いレースが繰り広げられた。前々回３位の松尾信太郎（福岡）が５周回終了時、また一昨年、昨年の連覇を含む過去３度の優勝を誇る小林潤二（群馬）が 13 周回終了後に退くことになった。その直後に落車が起こり、３周のニュートラルの後、再開して混沌の度合いを深める。１周のドローを挟んで各周ごとに一人減り、西村、小沼良（埼玉）、須永優太（福島）の３人が残った。西村が先行し、須永がそれについていけず脱落。小沼も３コーナー付近での西村のダッシュを追うことができずに敗退。西村が初めての栄冠を手にした。